
魔法使いを拾いました

東和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いを拾いました

【Nコード】

N0245Z

【作者名】

東和

【あらすじ】

七月七日　それは私が鷹夫たかおさんと結婚した日。結婚して今日で三年目、私たちは離婚した。そしてその夜、私はごみ捨て場で男の子を見つける。自分を「魔法使い」と名乗った男の子は、なぜか私の部屋に住み着いた。（浮気、離婚の話があるのでR15タグを付けてます）

1：七月七日

すみずみまで書きもらしがないか確認した。鷹夫たかおさんにも確認してもらい、私は印鑑にベツトリと朱肉をつけて、自分の名前の横に捺した。

鷹夫さんは、私の顔を見ずにそれをそそくさと茶封筒にしまった。「ほかに書くものある？」
「ない」

どこか申し訳ない返事。

「なら行くわね。ほかに私がすることはあるの？ あるなら手短にしてくれないかな。用事があるの」

「いやいい。大丈夫だ、なにもない」

すりきれた赤いボストンバックを肩にかついで、三年間お世話になった家に背を向けた。

「縁ゆかり、すまない」

ドアを閉める前に、かすれた声で鷹夫さんの声が出た。私はふり返らない。

「そんな言葉を吐くくらいなら、プロポーズしてほしくなかったわよ」

七月七日。

結婚式をあげた日と同じ今日、私たちは離婚した。

2：赤い石のピアス

彼が浮気をしている。それを知ったのは、結婚二年目を過ぎてからだだった。彼のスーツにブラシをかけていると、胸のあたりになにかがあった。ひっくり返してふるうと、内ポケットから赤い石のピアスがポトツと床に落ちた。

私は、ピアスホールをあけていない。

なら、なんでこんなのがここに？

まさか……浮気なんて。ありえないわ、だって彼は私を愛してるって言ってくれるもの。そんなの、いや、でも。きつと気のせいよ。バカね、私　そう思いたかった。

でも、それはただの勘違いなんかじゃなくて、すべては現実だった。

もともと隠し事は長く隠せない鷹夫さんは、そのピアスについて聞いただせば、こちらがびっくりするほどあっさり浮気を認めた。相手は職場の事務課の人で、私より三つ年下の二十三歳。鷹夫さんが勤める会社は、男性ばかりの建築会社だ。少ない女性社員、その中でも相手の女性はかわいらしい容姿でずっと年下。

「気がつけば目で追っていたんだ」そう告白した鷹夫さんの顔は、彼が私に告白したときのそれにどこか似ていた。

3：一ノ瀬鷹夫

「縁ちゃん、やっと名字が七緒ななおさんに戻れたねえ」

私の勤め先は「エコー」という小さな雑貨屋さんで、オーナーは六十を過ぎた吉森よしもり老夫婦だ。旦那やいちろうさんは弥一郎さん、奥さんはコズエさんという。二人は私小さなころから知っているので、「縁ちゃん」と呼んでくれている。

鷹夫さん……一ノ瀬さんが浮気をしていると知った二人は、私以上に怒ってくれた。わざわざ一ノ瀬さん呼び出して怒鳴りつけたくらいだ。あのときばかりは、一ノ瀬さんへの怒りがすっとんでしまった。

「あのウジ虫は二十九歳だったよねえ」

「浮気の相手さんは二十三歳だから、まあなんとというか、若いコならいいのかしら。イヤだわ、ほんとおに」

「あのウジ虫のせいで、縁ちゃんにバツテンが一つついてしまったねえ」

「社会的に抹殺されてしまえばいいのよ」

「そうだねえ」

「いやでも、お二人のおかげで慰謝料とかはたくさんふんどくれましたから」

「当たり前さ！ あのウジ虫からしぼれるだけしぼらないとアタシら、アタシら、うっ」

「お母さん、泣くんじゃないよ。縁ちゃん困っちゃうだろう」

「わかってるよ。でも、アタシや縁ちゃんのご両親になんていえばいいんやら」

早くに私の両親は他界している。二人はそのことを知ってから、私は自分の子どものように可愛がってくれている。一ノ瀬さんとの離婚も、二人がいないとまともにはできなかつた。

「お二人のその気持ちだけいただきますから」

「そうなのかい。イヤだよ、遠慮はしないでくれね」二人は、し
わくちなな顔でニコリと笑った。

「もちろんです」

私は、いつもと同じように笑って返事ができただろうか。

4：処分方法

「そろそろ私はお邪魔しますね」

「もう帰っちゃうの」

コズエさんは、まだ話し足りないらしい。

「二人と話してたら、時間がたつのが早くてびっくりですよ。ほら、もう三時すぎ」

「あらあら、ほんとだねえ」

「それに、ちよつと今日は質屋に行きたくて」

足元の赤いポストンバックを指差した。これは、私の誕生日に弥一郎さんがくれたものだ。愛用して長くなるけど、まだまだ現役で活躍してくれる。

「一ノ瀬さんに私があげたものとかを売りにいくんです。慰謝料もしっかりもらってるけど、なんだか一ノ瀬さんのものにしておくのがもつたいなくて」

私が一ノ瀬さんからもらったものは全部置いてきた。慰謝料金額が決定したとき、一ノ瀬さんは顔が真っ青になっていた。彼だけじゃなく、浮気相手の人もそれは同じ。実際の金額より安く慰謝料を見積もっていたんだろっからね。

まあ、ご愁傷様よ。

そのときに、「私が一ノ瀬さんにあげたものはもっていきます。私がおもらったものは置いていくから、別に問題はないでしょう?」

彼は、ただ首を縦にふるだけで返事をした。

「ブランド物もあるから、けっこうな額になるはずなんで。それでプチ旅行を計画したいんですよ」

「いいねえ旅行。僕もよくお母さんと旅行をしたよ」

「お父さんはいつも迷子! しまいには迷子札を持たせてね」

「違うよ、お母さんが迷子になってたんだよ」

「迷子になる人はね、みなそう言うのさ!」

照れた顔で弥一郎さんが「それはもう聞きあきたよ」とそっぽを向いてしまった。

うらやましいなあ。

私も、いつかこんなふうに鷹夫さんと年をとって……。

「縁ちゃん？ どうかしたの？」

「や、なんでもないですよ！」

「そおかい？ 気をつけて帰るのよ」

「相談にはいつでもものるからねえ」

「じゃあ、また来週に」

一週の休みの間に、一ノ瀬さんをちゃんと愛してましたといえるようになるう。

いえるようにならなきゃいけないんだから。

浮気がわかってからのゴタゴタと、浮気相手とのゴタゴタを心配する必要はもうない。肩にのっていた漬物石みたいな重さはどこかにとんでいった。

今日で、私たちは赤の他人になった。なったんじゃなくて、戻ったというのかもしれない。彼と、「一ノ瀬鷹夫」という男性と出会う前に戻っただけ。

「実は、まだ、彼との愛を捨てれない、でしょう」
「いやらしく私の心が笑う。」

うるさいなあ。ちょっと黙っててよ。

そいつは細く笑い声をあげながら、胸の奥底にひっこんだ。

5：ごみ捨て場

時刻表は九時すぎ。こんな時間になってから、お風呂場の電灯がきれていたのをおもいだした。近くの家電屋さんがたしかまだ開いていたはずだったから、財布をひつつかんで急いだ。

無事に電灯は買えた。

買えたはいいんだけど、これはないよ。

「ウソでしょーもう！ 雨がふるなんて聞いていわよ！」

着ていた薄手のシャツを頭からかぶって、土砂降りのなか走りぬける。雨で服がべったり肌にはりついて気持ち悪くてたまらない。夏なのが救いかも。もつと気温が低いときにこんな状況になっていたら……うん、間違いなく風邪だわ。

道は真つ暗で走りにくい。街灯はあるけど数は少なく、それにくわえてブツンブツンと点滅しているから頼りにならない。唯一ちゃんといてるのは、もう少し先にあるごみ捨て場のだけだ。

「いやー！ もう雨きらいー！」

やっとごみ捨て場の街灯が見えた。そこを曲がってちょっと走れば、もう我が家だ。

さあ、ラストスパートをかけるのよ縁！

地面をけるたびにとびちる水溜まりを気にする余裕はない。もうびしょ濡れだから、いまさらどう濡れようが関係ないし、なにより早く帰りたい一心でスピードをあげた。

「あと、少し みいいっ！」

足元をみてなかったのが悪かった。ごみ捨て場をすぎようとしたちょうどそこで、なにかに足をとられて豪快にこけた。

痛い、地味に痛い！

電灯が割れるのを死守するために、両手が使えなかったのが悪かった。顔面からこけるのはまぬがれたけど、あごと二の腕、そしてひざがジクジクと痛い。

「あうう。いったいなによお」

こんなに盛大にこけるとか、いつぶりだっけ。
私をこんなにしやがった原因はなによ！

「あ、うえ？」

薄汚れた灰色のかたまりが落ちていた。

「なにこれ、え、え」

雨でぐっしよりに濡れていて、泥だらけのその物体。
ごみ捨て場から半分はみでた形で、それはあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0245z/>

魔法使いを拾いました

2011年12月3日22時45分発行